思索の病による苦痛より脱出の為に、悟浄は流沙河底の遍歴の旅へと発つ。数々の妖怪の思想家達との出会いの後、彼は観世音菩薩と出会うのだが、この出会いこそが彼を、苦悩を抱えつつもそれが「苦にはならなくなる」位置にまで押し上げたのである。この観世音菩薩による後押しがあって初めて、三蔵一行と出会う可能性を悟浄は獲得したのだ。しかし、何故に観世音菩薩は彼の前に現れたのか。その問いに答えることは作家の思索者救済の法を解き明かすことになるに違いない。本発表ではそこに力点を置いて作品分析を進めてゆく。

註…詳しくは拙稿「悲劇性の受容――中島敦「悟浄歎異――沙門悟浄の手記――」論」(『文教国文』二〇〇一年三月　第三〇号)を参照していただきたい。

《中国学》

曹端試論

本学非常勤助手　岡野康幸

朱熹の没後、継承された朱子学は、従来「朱子の亜流」と見なされ、顧みられるはさして多くなかった。しかしその実態を精査して行くならば、ある意味で、朱熹思想の特質がより徹底し、より深化した跡が認められる。

朱熹は『太極図説解』に、「太極之有動静、是天命之流行」と注しておきながら「朱子語類』の記載には「太極理也、動静気也。気行則理亦行、二者常相依而未嘗相離也。」として、気が動くと理である太極が動くとする。それについて曹端は「大極が動静する」と異議を唱える。また朱子に於いて「敬」は工夫の手段でしかなかったものが、曹端に於いては学の根本と見做されるようになる。

今発表では、曹端(号は月川)の「太極図説辨戻」並びに「敬」の解釈に焦点を当て、朱熹、及び曹端と後世の朱子学者達と比較しながら曹端思想を解明して行きたい。

李見羅の修養論

博士後期課程二年　鍋島亜朱華

明末の李見羅(名は材、字は孟誠。一五二九～一六〇九)は、『四書』の中でも特に『大学』を重視した思想家である。彼は同時期の陽明学左派の思想に対して懸念を示し、心に重きを置かず、修身の為の工夫こそが重要であると考え、『大学』は真に孔・曾の教えを伝えるものであるとし、「修身を本とする」ことを基本に自説を展開したのであった。

黄宗羲は『明儒学案』の中に止修学案を立てるに当たり、見羅について「鄒東廓に従学したれば固り王門以下の一人なるも、別に宗旨を立てたれば、別に一案と為さざると得ず」としながらも、「其の良知の弊を救ふを以てすれば即ち亦王門の孝子なり」という。またかの大塩中斎は、その『洗心洞箚記』(上)において王学の修己済民における功を説くなかで「夫の李見羅の止修の学、呂新吾の呻吟の工と雖も、皆此(王学)に蒸出し、東林諸君の学も、多く亦此に導源す」と説く。